
黒の組織との対決?! 知られてしまった正体・・・

桔梗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の組織との対決?! 知られてしまった正体・・・

【Nコード】

N1676W

【作者名】

桔梗

【あらすじ】

「ひよんな事から始まった・・・。恐怖の始まり。恐れていた事が起きてしまった・・・。工藤 新一が生きている事が奴らに・・・。」

この、絶対絶命の状況下の中、コナンはどうする!?

1、突然の恐怖（前書き）

第二作です。第一作も更新していますが、こちらも宜しく願います。

1、突然の恐怖

「話はひよんな事から始まった……。」

これは、ある日の事……。

「毛利探偵事務所」

ある依頼人が来ていた。

「ストーカーですか？」

小五郎が尋ねた。

「はい。なんか狙われてる気がして……。怖くて……。」

依頼人の女性が、震えていた。

「（ストーカー被害か……。これは、この人に発信機をつけてこの人の位置を常に確認した方が

良さそうだな……。）」

コナンは考えた。

「おねーさん。このバッグいいねえ！」

コナンはいつものように、話をして、相手の視線を逸らし、発信機と盗聴器を取り付けた。

「ありがとう。」

女性は、気まぐれお礼を言った。

「それから、依頼の事を聞き、俺達は捜査をしたんだ……。まさか、その狙ってる奴が奴ら

なんて思わなくて……。あの時に取り付けた発信機と盗聴器はジーンに見つかっちまったんだ。

「その女性の部屋」

「アニキ、それは何ですかい？」

ウォツカが聞いた。

「これは、発信機と盗聴器だ……。」「

ジンは答えた。

「なぜ、そんな物が？」

「さあな。とにかく調べてみれば分かる事だ。」

「フフツ。俺はゾクゾクしてくるぜ・・・こいつを仕掛けた奴を殺る事が出来るんだからな・・・」

ー同時刻 毛利探偵事務所ー

「・・・ずらかるぞ・・・グシュ」

盗聴器から潰される前に聞こえた音・・・一瞬だけど聞こえたあの声。

「（・・・まさか・・・ジン！あれには、俺の指紋が・・・まずい！このままだと・・・俺以外

にも危害が・・・それだけは・・・絶対に・・・蘭達はどうする・・・時間がない！一刻も早く

FBI・・・ジョディ先生に・・・俺に関わった奴らを・・・」

ーコナンは一刻を争う現状に一気に引きずり込まれた・・・。そ

う、この時から、生死を賭けた

戦いはもう、始まってしまったのだった。コナンは、次の日になる前に、ジヨディ先生に事情を

全て話し、服部、和葉には東京に急きよ来るように言い、両親には、外国の両親が居る所に、

FBIが護衛をつけてくれる事になり、東京にいる皆は、適当な嘘を蘭達にはついたが、

どうにかFBIに保護してもらった。ただ一人・・・納得してくれない人物を除いて・・・。

1、突然の恐怖（後書き）

とりあえず、コナンに深く関わった人はまとめてしまいました。
みません。

2、指紋照合（前書き）

桔梗です。二話をお楽しみ下さい。

2、指紋照合

次の日になり、コナンは自分に深く関わったみんなをFBIに保護してもらう作業は完了

した。コナンは黒の組織の事を考えていた。

I F B Iの中―

「これで、周りの人間は大丈夫だ。」

コナンは一安心した。突然、後ろから声がした。

「あなた、自分は何をするつもり？」

灰原は、厳しい表情を浮かべながら、コナンを見た。

「狙われているのは俺だ。俺がここにいたら、あいつらにも、迷惑をかける。お前にもな。」

だから・・・」

「ここにはいられないとか言うつもり？」

「・・・。」

「大体、なんでいきなりジン達があなを狙うのよ？―から説明しなさいよ。」

コナンは、まだ誰にも、この事は話していなかったのだ。

「・・・事務所に依頼人がきてさ・・・ストーカー被害に遭ってたらしいんだよ。それで、その

ストーカーが奴らで・・・彼女は殺されたよ。」

「それで、なんであなたが標的にされなきゃならないのよ？」

「渡っちまったんだよ・・・奴らに俺の指紋がべったりついた発信機と盗聴器が・・・」

「えっ・・・」

灰原は血の気が引いた。

「だから、俺に関わった蘭や博士、服部、和葉、子供たち、お前もFBIに保護して

もらったんだ。」

灰原は震えていた。

「お前は、ここにいろよ？じゃあな・・・」

コナンは歩こうとした。

「駄目よ・・・やめなさい！あなたもここにいなさい！行かないで・・・お願い！」

「悪い・・・灰原・・・プシュッ・・・」

コナンは灰原に麻酔針を打ち込んだ。

「工藤君・・・だめ」

灰原は倒れた。コナンは、灰原を椅子に座らせた。

「悪い・・・灰原。オメーらを巻き込む訳にはいかねーんだ・・・」

「

「その後、コナンは黒の組織に備えた準備をし、FBIの人に、灰原が出てきたら、

止めるように、言い、FBIのジョディ先生と行動をとにした。

「黒の組織 アジト 研究室」

「コイツの指紋を調べろ」

ジンは部下に命令した。

「分かりました。」

「アニキ、楽しみですねえ。」

ウォッカがジンを見て、言った。

「……。」

「部下は、調べ終わったので、ジンとウォッカに話した。

「どうだったんだ？」

「はい。この指紋の人物は……工藤 新一です。」

「何！？そのガキは……アニキがばらしたはず……。」

ウォッカは言った。

「フツ……面白い……。」

ジンは笑った。

「ですが、組織のデータベースでは死亡確認になっています。」

部下は言った。

「大方、シエリーが書き換えたって所だろう。あの女は組織に反抗していたしな。」

「それで、毛利小五郎があの子を殺す前に会っている事が確認できました。」

部下は言った。

「工藤新一の消息を調べろ。俺は、思い当たる節を当たってくる。」

「分かりました。」

「「工藤新一がまさか生きていたとはな・・・クククツ。これから面白くなりそうだな。」

おそらく、シェリーも工藤新一という。」

ジンは不気味な笑みを浮かべていた・・・

2、指紋照合（後書き）

ばれてしまいました・・・。どうする新一！次話をお楽しみに！

3、ベルモットの微笑み（前書き）

かなり、更新が出来ず、誠に申し訳ありません。
でも、読んで頂けるとうれしいです。
感想も、待ってます。

3、ベルモットの微笑み

ジンとウォツカは、ポルシェ356Aで、探りを入れていた。数分後、ウォツカの携帯電話が

鳴った。ウォツカはその鳴り響く携帯電話を手に取り、通話ボタンを押し、耳に当てた。

「おう。どうした？なんか進展があつたか？」

ウォツカは、部下に問いかけた。

「黒の組織 アジト 研究室」

「はい。工藤新一の事について調べたのですが、毛利小五郎が有名になったのは、工藤新一

が失踪した時とほとんど一致しました。それまでは、毛利小五郎は全く有名ではありません

でした。あと今、FBIが動いているようです。」

部下は調べた結果をウォッカに話した。

~~~~~

「そうか。了解。また新たな情報を見つけたら電話しろ。 - ピッ。

」

ウォッカは、携帯電話をコートにしまった。

「何か分かったのか。」

ジンは、タバコを吸いながら、電話の内容をウォッカに聞いた。

「毛利小五郎が有名になった時期と工藤新一が失踪した時期は一致するみたいで、

毛利小五郎は工藤新一が失踪した直後に、いきなり有名になったらしいですぜ。」

ウォッカはジンに電話の内容を伝えた。

「コン、コン。」

誰かが、車の窓をノックした。

「ベルモット。」

ジンは、そう言って、窓を少し開けた。

「ジン？今日はどうしたのかしら？なぜか、ボスにも知らせないで・・・」

ベルモットは、バイクに乗りながら、ジンに質問した。

「工藤新一を探してるんだ。」

ベルモットは、思っても見なかった事が起きていたので、顔には出していないが、びっくりに

した。

「工藤新一は死んだんじゃないの？」

ベルモットは知らないふりをして、ジンに問いかけた。

「ああ。死んだと思ったがな。生きている。昨日消したあの女のバッグについてたんだ。」

工藤新一の指紋のついた発信機と盗聴器がな。」

ベルモットは、目を見開いた。ジンには、ヘルメットで見られなかった。

「そう。でも大丈夫？ボスにあなたが勝手な行動している事がバレたりでもしたら・・・」

ジンがベルモットの言葉を遮った。

「フン・・・早く終わらせればいい話だ。」

ジンは、笑いを浮かべた。

「そう。まあ幸運を祈ってるわ・・・」

ベルモットは、バイクのスピードを上げ、ジンの車からは見えな

くなつた。

ーブオー・ーン……

ベルモットは、高速をバイクで走っていた。

「（早く終わらせる事ができるかしら……。私の愛しのシルバ  
ーブレット君を……

もしかしたら……。ジン……。あなたでさえも、その冷血感を保つ  
ては居られないかも……

フフフツ……。楽しみだわ……。」

ベルモットは、バイクに乗りながら、そう考えていた。

### 3、ベルモットの微笑み（後書き）

今日更新できましたが、できなかったらごめんなさい・・・  
次話もお楽しみに

#### 4、現れたベルモット（前書き）

おはようございます。桔梗ですっ！黒の組織の小説は考えるのは頭つかいますね。

でも、頑張りますので、見て頂けるとうれしいです。



#### 4、現れたベルモット

「コナンはジョディと行動していたが、ジョディには一言も自分が狙われる事を話して

いない。というか、話す事が出来ないのだ。話してしまえば、工藤新一ということが、

ほとんどばれる事になる。そう考えたコナンは、危険だが、一人で行動する事にした。

~~~~~

ジョディとコナンは、交差点の所にいた。コナンは話を切り出した。

「ジョディ先生。」

ジョディはいきなり、コナンに話しかけられたので、少々びっくりした様子だった。

「ん？なにかしら？」

ジョディは、真剣な顔をしたコナンの方を向いて、聞き返した。

「ごめん。僕ちよつと別行動するね！なんか分かったら教えてねっ！」

コナンは、あまり深く聞かれたくなく笑顔でジョディの話を聞く間もなく、走った。

「ちよつと・・・。coolkid！」

ジョディは、笑顔で走るコナンの背中を見ながら、ジョディはなにか違和感を感じたが

特に、強くは気にしなかった。ジョディはとりあえず、車に乗り込んだ。

一方、コナンはジョディから、随分離れたので、走るのを止めた。

「これから、どうするか・・・。」

そう、頭で考えていたら、コナンは後ろから誰かの気配がした。
近づいて来る気配に

コナンは、警戒し時計型麻醉銃を構えていた。

「そんなに、警戒しないでよ。cool guy。」

その気配の正体は、ベルモットだった。

「ベルモット！・・・」

コナンは、少し驚いたが、すぐに平静を取り戻した。

「cool guy・・・教えてあげるわ。今組織がなにをしているか。」

ベルモットは、微笑みながら情報を提供すると言ってきたのだ。
コナンは、予想外の

ベルモットの一言に真剣だった。

「でも・・・いいのか？そんな事してる事、奴らに見つかったら・・・」

コナンは、疑問をもちながら、少し心配していた。

「大丈夫よ。私は女優よ？あなたが黙ってさえくれたら、やり過ぎ事は出来るわ。」

「ベルモットはものすごく余裕と言いたいような口調で、言い返した。コナンは、了承を

した後、ベルモットが、教えてくれる情報を聞く準備をした。その後、ベルモットはコナン

に話し始めた・・・

4、現れたベルモット（後書き）

ベルモットが、危険を冒してまで、情報を教えてくれる優しさ・・・

次話は、ベルモットの話の続きです。

5、情報（前書き）

どうもー！桔梗です。

10月という事で「親友との間に起こる悲劇」の後に書くつもりだったのですが、

書かせていただきました。かなり久しぶりですが、読んでいただくと幸いです。

5、情報

「ベルモットは、組織が今何をしてるかを話し始めた。

「・・・もうすでに、組織は貴方の盗聴器と発信機は調べられていて探しているわ。」

コナンは、想像した答えが返ってきてやっぱりなと思っていた。

「工藤新一としての貴方をね。」

コナンは、少し目を見開いていた。そして、口を開いた。

「江戸川コナンは、まだばれてはいないのか？」

コナンは、ベルモットに聞いた。

「ええ。でも、時間の問題よ。辛うじて、シェリーがAPT X 4 869のデータを組織に

教えていないけど、シェリーは、裏切り者だから工藤新一のデータを書き換えたって事は、

ばれているしね。それに、毛利小五郎が有名になった日と工藤新一の失踪が同時期だって事は、もうばれてるわよ。」

ベルモットの言った事は、コナンはこうなっている事を承知していた。

「もう一つ、教えてあげる。今回の工藤新一を殺すというのは、ジンが、単独で仲間を連れてやっている事よ。だから、ジンは、冷静さを失いかけているわ。」

「そうなのか・・・」

コナンは、勝算を考えていた。ベルモットは少し笑うと、バイクに乗り込んだ。

「私は、そろそろ行くわ。幸運を祈っているわ・・・cool guy・・・」

バイクは発進し、コナンの前は誰もいなくなった。

「（そうか・・・やはり俺が工藤新一とばれるのは時間の問題だな・・・。」

作戦を立てないとな・・・」

コナンは、頭の中で作戦を立てていた。

5、情報（後書き）

こんな感じかなと思い、ベルモットを書かせて頂きました。
次話も、お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1676w/>

黒の組織との対決?! 知られてしまった正体・・・

2011年10月10日06時20分発行